

50回大会で3連覇を飾った「チームきのたけ」のメンバーと樋口社長(右)



川崎陸送■QC大会

坂戸センター3連覇

ライン作業で生産性向上

川崎陸送(樋口恵一社長、東京都港区)は6月22日、50回目となるQCサークル(小集団活動)代表発表大会を開いた。予選を勝ち抜いた10チームが業務改善について発表し、生産性向上による時短に取り組んだ「チームきのたけ」(坂戸流通センター)が3連覇した。

チームきのたけは総実労働時間を減らすため、生産性向上に取り組んだ。パート従業員が退勤し、ライン作業員が減る時間帯に生産性が低下することに着目。それまでは朝の時間帯にライン作業の仕込みを行っていたが、前日に済ませることでライン作業の開始時間を前倒しし、パート従業員の勤務時間内に終わらせるようにした。併せて従業員それぞれの待機時間をホワイトボードで「見える化」した。

そのほか、エコシャトルの回収効率向上で「関門海橋」(山口営業所)が優良賞を受賞。人員削減による業務改善を進めた「ひよこ物流」(赤穂営業所)とドレーシ手配の見直しに取り組んだ「湾岸クラブ」(通関東京営業所)は努力賞となった。

また、50回目を記念して審査員特別賞を設け、荷主との連携で運行の安全確保に努めた「みずほPGTO」(西多摩営業所)が選ばれた。

審査委員長を務める樋口由人取締役は「今回の発表大会では『そもそも』という言葉を使うチームが多く、良かった。QC活動ではそもそもの仕事、契約、料金を見直すことが重要となる。また、大会で評価されるには、実現までのスピードと、金額面での効果も問われる」と話した。

一方、樋口社長は冒頭のあいさつで「少子高齢化が進む日本では、いずれ毎日のように高齢者ドライバーによる交通事故が起る恐れがある。若い人は関係無いと思うかも知れないが、追突され、巻き込まれることもある。十分に車間距離を取り、防衛運転に努めて欲しい」と述べた。

また、2020年の東京オリンピック・パラリンピック大会での渋滞抑制策に触れ「講じられる施策によっては、配送が成り立たなくなる」と危機感を示し、大会後の懇親会でも、1979年の東京サミットを引き合いに出し「車両の配送効率が約半減となった」とを説明した。

(辻本亮平)